

特集「ソフトウェア工学の変化と深化」の 編集にあたって

飯田 元^{†1} 山本 里枝子^{†2}

昨年（2008年）に開催された国内外のソフトウェア工学関連の会議では、ソフトウェアエンジニアリングという言葉の「誕生40周年」、つまり、1968年にドイツのGarmischでa Working Conference on Software Engineeringが開催されて以来40年目、ということがしばしば話題とされた。ソフトウェア工学研究会（SIGSE）が9月に開催したソフトウェアエンジニアリングシンポジウム2008（SES2008）においても、これまでのソフトウェア工学を振り返ると同時に今後を見据えるための企画が練られた。SESはSIGSEの看板イベントとして位置づけられ、ソフトウェアエンジニアリングに関わる研究者・技術者・実務家が集い、議論を交わし、最新の研究と実践についての情報を得る場を提供するための場として、2006年から開催され、年々、企画に工夫を重ねている。

「ソフトウェア工学誕生」以来40年、ソフトウェアの規模や社会に果たす役割は増大の一途をたどり、社会的・経済的活動の根幹を担うシステムから、携帯電話や情報家電など個人に身近な分野、自動車の制御といった厳しいリアルタイム性が要求される分野まで、その対象は広がり続けている。一方、ソフトウェア開発の形態もオープンソース方式での開発や海外への一部アウトソーシングなど様々な変化を迎えている。こうした変化に歩調を合わせて、技術体系としてのソフトウェア工学も「変化」を追求してゆくことが肝要であり、一方で、ソフトウェアの生産性と品質の向上というソフトウェア工学の至上命題に変化はなく、普遍的に取り組むべき技術についてもまた、地道な継続と積み重ねによる「深化」が必要である。このような考えから、SES2008で特に優秀であった発表をきっかけとして、ソフトウェア工学の変化および深化を主題に据えた特集を組むことはソフトウェア工学分野にとっ

て大変意義のあることと考え、今回の企画に至った。

本特集では上記の考え方に鑑み、ソフトウェア工学の現状と今後の展望を知らしめるため、基礎理論から開発現場における経験・知見の報告や、支援ツールの開発等に至る幅広いスペクトラムの論文を集めるよう努めた結果、39件の論文投稿を得た。編集委員には、SES2008のプログラム委員を中心に、ソフトウェア工学の諸分野をカバーすべく、下記の方々を迎えた。オンライン会議を含め、2009年4月、6月、8月、3度の編集委員会を経て最終的には10件が採録された。特集号の趣旨として、新規性の高い論文のみを重視するのではなく、実用性の高い論文や、有益な知見を示した論文を積極的に採録する姿勢で臨んだが、一方で、新規性は高くとも結果の評価が物足りないなど、改善に時間を要する投稿については、特集号スケジュールの制約上、採録を見送らざるを得ないものもあった。このような論文については改善を行った上での再投稿を強く期待するものである。

最後に、本特集の編集にあたって手助けをいただいた、幹事および編集委員の方々へ投稿していただいたすべての会員の皆様に深く感謝する。

「ソフトウェア工学の変化と深化」特集号編集委員会

● 編集長

飯田 元（奈良先端科学技術大学院大学）、山本里枝子（富士通研究所）

● 編集委員（五十音順）

阿萬裕久（愛媛大学）、海谷治彦（信州大学）、楠本真二（大阪大学）、
小林隆志（名古屋大学）、佐伯元司（東京工業大学）、坂田祐司（NTT データ）、
紫合 治（東京電機大学）、白銀純子（東京女子大学）、立石孝彰（日本IBM）、
名倉正剛（日立製作所）、野中 誠（東洋大学）、樋山淳雄（東京学芸大学）、
羽生田栄一（豆蔵）、丸山勝久（立命館大学）、満田成紀（和歌山大学）、
森崎修司（奈良先端科学技術大学院大学）、山崎浩一（群馬大学）、
山城明宏（東芝ソリューション）、山本修一郎（NTT データ）、吉田 敦（和歌山大学）、
鷲崎弘宜（早稲田大学）、渡部卓雄（東京工業大学）

†1 奈良先端科学技術大学院大学
Nara Institute of Science and Technology

†2 富士通研究所
Fujitsu Laboratories